

## 王朝文学と近世邦楽の豊穡な結合に遊ぶ

昨年は源氏物語千年紀ということで、この我が国最高の文芸作品がずいぶんクローズアップされました。平安時代と江戸時代、この遠く離れた二つの時代区分は、文化の面において「国風」の匂いを濃厚に感じさせますが、社会の構造や国際情勢などには大きな違いがあります。おおざっぱに言えば、平安時代は貴族文化、江戸時代は町民文化の時代であり、平安時代の人々は江戸時代など予測できなかったに違いありませんし、江戸時代の人々にとってみれば、平安時代は遠く過ぎ去った遙かな過去と感じていたことでしょう。

古典主義的な動きがあらわれます。その中で、たとえば源氏物語や古今和歌集のような、王朝の文芸作品が音楽や絵画に取り入れられるといったことがしばしば行われました。しかしこれらの作品も、決して源氏物語に「べつたり」ではないということも非常に重要です。源氏物語のシーン、あるいはあらすじから始まって、途中でしばし、そこからすら離れた純粹な音楽的展開の中に遊び、そしてまた再び源氏の世界に戻って来る……日本の伝統芸術にしばしば共通してみられる、こんな邦楽の醍醐味を味わって頂ければ幸に存じます。

絃詩会 三曲の調べ

# 源氏物語に遊ぶ

桐壺

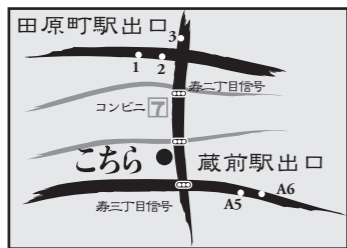
夕顔

新玉鬘

新青柳

新浮舟

2009年  
12月  
20日(日)  
12時半開場  
13時開演



会場：浅草 ことぶ季亭  
東京都台東区寿1-6-7ユーハイツ仲光203  
TEL:03-3847-5547

銀座線田原町より徒歩3分、  
大江戸線蔵前駅より徒歩2分  
都バス 寿三丁目(大塚一錦糸町)

 絃詩会  
ITO-UTA KAI ASSOCIATION  
www.shamisen.net

Copyright © ITO-UTA Association, 2009.  
All Rights Reserved.  
無断転載を禁じます

Graphic Design by Eric UK.



## 王朝文芸と近世邦楽との関係

いわゆる近世邦楽、つまり江戸時代（安土桃山時代も含めて）の音楽の数多くのジャンルの中で、王朝文学が題材として扱われたのは、ほとんど地歌・箏曲の、つまり「三曲」と呼ばれる範疇の音楽に限られています。やはり当時の文化の担い手であった市民たちには、ことに江戸時代も前半においては、王朝文学（特に源氏物語）はかなり敷居の高いものであったと思われる。

歴史的に見れば、王朝文学の薫りは江戸時代前期の箏の音楽である「箏組歌」にまずしばしば現れます。これは箏という楽器が、奈良平安時代以降貴族たちにもはやされた雅楽由来の楽器であり、江戸時代においても、八橋検校によっていわゆる近世箏曲が確立されて以来、古典文芸の教養豊かな武家や上流市民に多くたじなまれて来たといういきさつがあると思います。

一方、箏曲と共に盲人音楽家たちが専門とした三味線音楽である地歌としては、江戸時代前期においては、ごく断片的なものを除いて王朝文学が題材とされることはほとんどなかったのですが、江戸後期に入る頃からそのようなものが次第に作曲されるようになります。ひとつには箏曲からの影響があるでしょうし、また藤尾勾当により始められた「謡曲もの」のように、武家の式楽であった能楽、謡曲の詞章をそのまま歌詞とする曲が作られる、つまりいったん能を経由するかたちで、古代説話や王朝文学、中世文学が地歌に取り入れられることとなります。

さらに化政期ともなると、能を経由せずに直接源氏物語から取材する傾向すらあらわれます。これは当時の国学の発展とも、また市民階級の文化的成熟とも関わることであろうと思います。

これら江戸時代後半の作品を聴くと、それはもはや王朝時代へのムーディーな、単純な憧れといったものでは決してなく、夕顔や柏木、玉鬘や浮舟といった登場人物の、複雑に交錯する心の綾に、まるで彼らがごく身近な人間であるかのような共感を、作曲者を始めとする当時の人々が覚えているふじが強く感じられます。

江戸時代後半には国学の発展にも支えられ、古典としての王朝文学を見直し学ぶ気運が高まりました。その結果、単に古典の素養というのではなく、自らの美意識や思想の一つの拠り所、源泉として、文化の担い手の中心であった市民階級が、王朝文学を自らのものとして消化し、自家葉籠のものとしていたと考えられます。そしてもちろん、化政期から幕末に至るまでの間に、京都楽壇に極めて優れた作曲家たちが次々と輩出したこと、一方で源氏物語の、文芸作品としての抜きん出た秀逸な心理描写に拠るところも大いにあることでしょう。長唄や義太夫節のような劇場音楽では表わすことの難しい、実にデリケートな心理の綾、また複雑精緻な音楽的展開などを考えると、地歌箏曲を専門とした検校、勾当といった盲人音楽家たちによってこれらの曲が作られたこと、これは、内省的な面を強く見せる源氏物語の内容を音楽的に表現するには好適であったであろうと思われる。

## 源氏香の図について

今回各曲目の題名に飾る図案は、「源氏香の図」によるデザインです。お香を聞き当てる遊ぶ「組香」のひとつ「源氏香」では、五種の香、各五包による二五包をよく混ぜて、そこから五包を選んで炷き出し、聞きを記します。五本の縦線が右から順に一疍から五疍の香を指して、同香だと思ったら縦線の上部を右から横線で繋ぎ、「源氏香の図」を見ながら自分の書いた図を照合し、源氏物語の該当する巻名を書いて答えます。例えば、二疍と三疍が同じ香で、ほかのは全て異なる場合には「夕顔」と答えます。

源氏香の成立は江戸時代まで遡ると見られるが、この明快な図も背景の文学性とともに広く好まれて、組香から離れ、染色や調度品などの文様として定着すると、用いられる季節や吉凶などが決められるようになりました。

## 音楽的な要素

一方、これらの曲の音楽的な要素を見てみると、平安時代を代表する音楽である、雅楽からの直接的な影響といったものは非常に少なく（箏組歌にはもともと楽箏の技法が反映されていますが）、全体に近世邦楽としての音組織や楽曲構成からはずれることなく曲作りがなされています。また能を経由して、能の詞章が歌詞として直接使われている曲においても、能楽の音楽的要素が反映されている例は多くなく、つまり江戸時代というその時の最新の音楽スタイルで作曲がなされているということができます。そこに当時の「今」に生きる市民階級の音楽家をはじめとする人々の、生き生きとした音楽作りを感じ取ることが出来ると思います。

そして、「手事もの」という、長大な器楽部分を重視する楽曲形式が発展したことで、音楽が単に文芸に追従する姿勢を抜け出して、音楽そのものによる心理の表現、更にはそれも超越した純音楽的展開がみられるのも、これら地歌箏曲の魅力でしょう。

もっとも幕末になると、京の光崎検校や名古屋の吉沢検校により、雅楽の音階組織や楽句構造などを取り入れた作曲がなされるようになりますが、これらはむしろ源氏物語ではなく漢詩や古今和歌集とのつながりを持っています。

総じて、地歌・箏曲においても源氏物語を題材とした曲は決して沢山あるとは言いがたいのですが、それでも同時代の他の邦楽ジャンルに比べれば、数においては群を抜いており、かつまた秀逸な作品が多く、現在でも名曲として愛されている曲が少なくないのも事実です。

なお、今回演奏しないものでも、源氏物語にちなむ現存曲には以下のもがあります。

浮舟 三橋検校作曲 箏組歌  
四季源氏乙女の曲 箏組歌  
葵の上 作曲者不詳 地歌長歌物  
梓 作曲者不詳 地歌長歌物  
葵上 山田検校作曲 山田流箏曲  
石山源氏 山田流箏曲

# 桐壺

八橋檢校作曲

箏 原一男

八橋檢校（1614〜1685）は近世箏曲の始祖として名高い盲人音楽家で、三絃や胡弓の能手でもあり、それまで儀礼的、宗教的な音楽であった「筑紫箏」に、より世俗的な芸術性を加味した、近世にふさわしい箏曲を生み出した。名曲として名高い段ものの「六段の調」「みだれ」なども八橋の作品とされている。パッパやヘンデルが生まれた年に亡くなっている。

この「桐壺」は箏本来の楽曲形式である「箏組歌<sup>こしくみかた</sup>」の曲。八橋檢校の「十三組」のひとつで、教授システム上の分類では「裏組」に属している。歌詞の内容としては、一の歌に光源氏の生母である桐壺更衣と桐壺帝との恋が歌われているが、古い組歌の特徴として、各歌にあまり脈絡はなく、源氏物語に直接つながらないものが多いが、四の歌には「空蟬」が採り上げられたりもしている。

「箏組歌」は、器楽曲である「段もの」と共に、近世箏曲（俗箏）本来の曲であり、三絃のための「三味線組歌」や胡弓のための「胡弓本曲」と同じように、基本的には他の楽器との合奏を行わない。箏組歌はふつう六つの歌からなり、各歌は64拍子（128拍）と定められており、それぞれ更に八句の楽節で構成される。特に前半部の各楽節の冒頭は「かけ爪」という分散和音的技法に導かれて歌が始まり、後半では音楽的な展開により様々な技法や旋律が現れる。全般に歌の旋律と箏の旋律が離れているところが多い。

江戸時代中期になると、組歌は型にはまり過ぎて次第に作られなくなり、箏は地歌曲を取り入れ、三味線と合奏することで新たな活路を見いだして行くことになる。

菊岡檢校作曲八重崎檢校箏手付

歌 原一男

三絃 齊藤一統浩 中澤一之英 慶田 雅一

箏 中澤美保一

胡弓 團野佐保一 木場壺ノ助 小林 詩子

尺八 今井 祐介

源氏物語夕顔の帖に取材した手事も地歌の小品。作曲者菊岡檢校（1792〜1841）は文政から天保の頃に京都で活躍した盲人音楽家で、松浦檢校に続き京流手事ももの全盛時代を築いた。作品は「笹の露」「長等の春」「茶音頭」「ままの川」「磯千鳥」「楫枕」「今小町」「竹生島」「御山獅子」など多く、みな流麗で、現在も人気曲として演奏されることが多い。箏の手付けは同じく京都の八重崎檢校（1858年没）で、この人も地歌の箏手付けの名人としてよく知られ、菊岡とは名コンビで、ライバルであると共に良き楽友であったことが逸話として伝えられている。

曲は「前唄―手事―後唄」の典型的な手事もの形式によって作られている。手事ものとしては小品の部類に入るが、よく夕顔の雰囲気表現され、旋律もたいへん美しく、現代でも人気のある曲である。三味線の調弦は二上り、箏は平調子でそれぞれ最後まで通す。歌詞には光源氏と夕顔の間に交わされた和歌の一部が組み込まれている。

幾山檢校作曲

三絃 原一男 中澤一之英

箏 中澤美保一

尺八 今井 祐介

## 新玉鬘

作曲者幾山檢校（1858〜1890）は、幕末に京都で活躍した盲人音楽家。吉沢檢校と並んで幕末を代表する作曲家である。地歌三絃、箏の能手であり、彼の三味線の音は「金の鈴を振るよう」とも讃えられた。また平家琵琶においても優れており、公家などとも親しく交わり、家財も凝ったもので、裕福な生活ぶりであったと言われる。作品には幕末の手事もの地歌曲の名曲として非常に名高い「萩の露」をはじめ、「四季の寿」「磯の春」「川千鳥」、同時に演奏して合奏（打ち合わせ）するための「打盤」と「横槌」、京の端歌ものとして有名な「影法師」などがある。

その洗練された作曲法は、京流手事もの最後の作曲家と讃えられるほどの冴えを示しており、品位高く優雅な旋律、また高度で繊細な技法の用い方や、巧妙に交錯する三絃と箏の旋律の絡み合い、意表を衝く旋律の展開や転調など、とことん複雑に技巧を凝らした曲作りが特徴である。

なかでもこの「新玉鬘」は、その最たるものといってよく、前唄―手事―中唄―手事―後唄という、複式手事もの形式による堂々とした大曲である。三味線の調弦は本調子で始まり、二上り―高三下りと変わり、箏も半雲井調子―平調子―中空調子へと変わる。

もともと地歌曲は三絃で作曲され、後に別の人により箏の手付けが行われていたが、光崎檢校以降、次第に三絃、箏の両パートを一人で作ることが多くなった。この曲も幾山檢校により両パートが作られている。

### 源氏物語・玉鬘く堂

かつて、光源氏との逢瀬の最中、物の怪にとり殺された女性夕顔には、頭中将（現内大臣）との間に生まれた女の子が一人あった。四歳で乳母一家に伴われて筑紫へ下国し、乳母の夫太宰少弐が死去した後上京できぬまま、既に20歳になっていた。その美貌ゆえ求婚者が多く、中でも有力者である肥後の豪族大夫監の強引な求婚に困り果て、長男の豊後介にはかって船で京に逃げ帰った。しかし京で母夕顔を探す当てもなく、神仏に願掛けし、長谷寺の観音の御利益を頼み参詣の旅に出たが、椿市の宿で偶然、元は夕顔の侍女で今は源氏に仕える右近に再会した。右近の報告に源氏は玉鬘を自分の娘というふれこみで六条院に迎え、花散里を後見し夏の町の西の対に住ませた。（『玉鬘』）

玉鬘は聡明で美しく、光源氏の弟宮である蛭兵部卿宮をはじめ、髭黒、柏木（実は異母兄弟）など多くの公達から懸想文を贈られる。光源氏そのものも養父の立場を忘れて彼女に惹かれるのであった。五月雨の頃、兵部卿宮から玉鬘に文が届き、源氏はそれに返事を書かせ、喜び勇んで六条院にやってきた兵部卿宮の前で、源氏は几帳の内に蛭を放ち、その光で玉鬘の姿を浮かび上がらせて見せた。予想以上の美しさに心を奪われた兵部卿宮は想いを和歌で訴えるが、玉鬘はつれなくあしらう。（『蛭』）

#### 桐壺 歌詞

桐壺の更衣の 比翼連理の契りも
定めなき世のならひとて 夢の間ぞかなしき

短夜の夢さめて 面影は夏虫の
身より余る想ひをばい かで人に語らん

秋の夜は更けゆき 月は西に傾く
松風や波の音 鹿の声ぞさみしき

道しるべせし小君の 仲立ちに引かれて
行方迷ふか空蟬の 衣のかほりぞゆかしき

誰そや今宵 小夜更けて
柴のとぼそを叩くは 尾上おろしの訪れか

水鶏の告ぐる声 声が青柳の片糸に よりて鳴けや鶯
鶯の縫うてふ笠は 梅が枝の花笠

### 源氏物語・夕顔

光源氏17歳の夏、従者惟光の母親でもある乳母の見舞いの折、隣の垣根に咲く夕顔の花に目を留めた源氏が取りにやらせたところ、邸の住人が和歌で返答する。市井の女とも思えない教養に興味を持った源氏は、身分を隠して彼女のもとに通うようになった。可憐なその女は三位中将の娘であり、左大臣の息子にして光源氏の親友でもある頭中将の側室という立場にあったが、本妻の嫉妬を恐れて姿を消し市井にまぎれて暮らしていた。そんな自分の素性は明かささないものの、逢瀬の度に頼りきって身を預ける風情が心をそそり、源氏は彼女にのめりこんでいく。

あるとき、逢引の舞台として寂れた某院に夕顔を連れ込んだ源氏であったが、深夜に女の霊が現れて恨み言を言う怪異にあう。夕顔はそのまま人事不省に陥り、明け方に息を引き取った。

#### 夕顔・歌詞

住むや誰 問ひてやみんと黄昏に
寄する車の訪れも

絶へてゆかしき中垣の 隙間求めて垣間見や
かざす扇に焚きしめし 空薫物のほのぼのと

手事は 白露天を添へて

いとど茶へある夕顔の 花に結びし仮寝の夢の
覚めて見に染む夜半の風

### 源氏物語・行幸く真木柱

十二月には大原野への行幸が行われ、見物した玉鬘は冷泉帝の端麗さに見とれる。そんな心中を見透かしたように源氏は玉鬘に尚侍としての出仕を勧めた。源氏は初めて内大臣に玉鬘が実の娘であることを打ち明け、これまで娘を捜していた内大臣は喜んで装着の腰結いの役を引き受ける。（『行幸』）祖母の大宮が亡くなり、尚侍に任命された玉鬘は孫として喪に服しながら、出仕を思い悩んでいた。そこへ夕霧が父光源氏の使いで訪れ、従兄弟の縁に事寄せ藤袴の花を差し出しつつ、秘めていた想いを訴えたが、玉鬘は取り合わない。喪が明けて、玉鬘の出仕は10月に決定した。求婚者たちからは諦めきれない文が届き、とりわけ髭黒や蛭兵部卿宮は熱心だった。玉鬘はその中で、蛭兵部卿宮だけに返事を送った。（『藤袴』）

尚侍として出仕を控えていた玉鬘だったが、その直前に髭黒が女房の手引きで強引に契りを交わしてしまう。若く美しい玉鬘を得て有頂天の髭黒を、源氏は内心の衝撃を押し隠して丁寧に婿としてもてなしたが、無骨で雅さに欠ける髭黒と心ならずも結婚することになった当の玉鬘はすっかりしおれきり、恥ずかしさに源氏とも顔を合わせられない。すっかり見捨てられた髭黒の正妻北の方は絶望し、様々な騒動が巻き起こる。やがて玉鬘は男子を出産し、その後は出仕することもなく髭黒の正室として家庭に落ち着いた。（『真木柱』）

### 新玉鬘・歌詞

恋渡る 身はそれならで玉鬘

いかにやつれて筑紫潟 思はぬ人の仇恋に
憂きも辛さもこもりくの 初瀬の神の神垣に

掛けし患みも有明の 月の都の品定め

手事は

元の垣根は訪ひもせて その夕顔のゆかりさへ
頼まれがたき人心

身をおみ焦がす螢こそ 言はぬ想ひの乱れ髪
解けぬあたりに結びしも なかなか固き岩田帯

手事は

誰が許しの色に出て 盛りも見せじおみなへし
心も知らで同じ野の 露にやつるる藤袴
あはれをかけよ かごとばかりに

# 新青柳

石川勾当作曲 八重崎檢校箏手付

原一男胡弓手付

三絃 齊藤一絃浩 中澤一之英

箏 中澤美保一

胡弓 原一男

作曲者の石川勾当（生没年不詳）は文政天保の頃に京都で活躍した盲人音楽、作曲家。箏のほか三味線にも優れた人で、今に伝わる作品は多くないが、自分でも弾きこなせないほどの難技巧の大曲を作った音楽家として知られる。その石川勾当の「三つもの（三大名曲）」と言われるのが、この「新青柳」と「八重衣」「融」で、文政から天保の頃に作曲されており、いずれも高度な風格と高踏的な音楽表現、難技巧の大曲である。彼の作品は地歌のみならず、あらゆる三味線音楽の中でも、群を抜いて芸術的な香気に満ちていると言えるが、その生涯は不遇で、弟子も少なく、晩年は洛北に住ひ住まいしたと言われる。

この「新青柳」は、能の「遊行柳」から取材し歌詞を一部そのまま取り入れて作られた手事もの地歌曲である。たんに「青柳」とも言うが、これ以前にも「青柳」という曲があるので、「新」をつけて呼ばれる。その筋は、西行が歌を詠んだこともある奥州の柳の古木の精が、旅の遊行上人（一遍上人）に、源氏物語での女三宮と柏木の恋（『若菜・上』）など、柳についての故事を語るといふもの。同時代京都の音楽家、八重崎檢校が箏のパートをつけている。

堂々たる大曲で、曲の形式は手事もの大曲によく見られる、唄が三箇所、手事が二箇所（前唄―手事―中唄―手事―後唄）あり（当会ではこれを「複式手事もの」と呼ぶ）、楽曲形式がより複雑化している。また能から詞章を取り入れているので「謡曲もの」にも分類できるが、やはりこの時期の作品であるので、初期の謡曲もの作品とは違い、もはや音楽的な重点は歌よりも手事の方におかれています。初めは三拍子で、大変に複雑で技巧的な手事である。三味線の技巧の難度から言えば「八重衣」に一步譲るとしても、三オクターヴと三度と、他にほとんど例のない、最も広い音域が三味線に要求されてもおり、八重崎檢校による箏の手付けも巧妙に出来ている。いっぽう歌詞はごく要点のみを短く抽出した形で、聴く人はすでに源氏物語『若菜・上』や能の「遊行柳」を知っているという前提での曲作りである。しかし歌のパートも非常に良く出来ていて、ムラのない作品である。

この曲に特に言えることは、歌詞の取材元である「遊行柳」が夢幻能（能の形式の一つで、物語の筋が主人公の夢、または幻覚として展開して行き、最後に現実に戻って終わるもの）であることを巧みに活かしつつ、しかも手事が音楽的に非常に充実していることにより「夢幻化」が複雑になり、三段階の夢幻化が完成しているという点である。それはどういふことかという点、この曲を聴く者（あるいは弾き手）は、源氏物語―遊行柳―手事という、三つの世界を行きつ戻りつして、一番おしまいはそこから更に覚めて、現実の世界へと還って来るのである。その間、音楽的には数度の転調が繰り返されて、気分は高揚していく。歌と手事は一曲の中ながら決して相同ではなく、手事はその都度物語から離れつつ、純音楽的な器楽の展開を繰り返す。このように「新青柳」では夢幻の多重化というか多層化がじつに見事で、夢幻能と地歌の手事ものというそれぞれの様式が、たいへんにうまく複合して、じつに幅と奥行きのある素晴らしい音楽作品となっているのである。

# 新浮舟

松浦檢校作曲

八重崎檢校箏手付

原一男胡弓手付

三絃 齊藤一絃浩 園野佐保一

箏 中澤美保一

胡弓 木場芯ノ助

作曲者の松浦檢校は文化文政期に京都で活躍した盲人音楽家。地歌三味線と箏曲の演奏家、作曲家である。寛政十年（1798年）、檢校に昇格し、多くの名曲を残して文政五年（1823年）に亡くなった。彼の業績は何よりも「京流手事もの」を確立したということ。地歌の楽曲形式のひとつである「手事もの」は、歌―手事（器楽）―歌という声楽の途中に器楽を挟んだと言ってよいスタイルで、松浦檢校よりも一時代前の天明から寛政の頃に大阪の盲人音楽家、峰崎勾当が「越後獅子」「残月」「吾妻獅子」など、長大な手事を備えた名曲を多数作り、手事ものを大成した。松浦檢校はその手事ものに、更に京風な洗練を加えた作品を沢山残した。以後石川勾当、菊岡檢校、光崎檢校、幾山檢校など、天才的な音楽家が京都の楽壇に次々とあらわれて、幕末に至るまで珠玉のような手事もの名曲を数多く作っている。これらの曲群を「京流手事もの」と呼ぶ。

松浦の「四つもの」と呼ばれる四大名曲として「四季の眺」「四つの民」「宇治巡り」「深夜の月」があり、ほかに「末の契」「若菜」「里の暁」「玉の台」「新松尽し」など、現代でも演奏される作品が多い。松浦檢校の作品の特徴というべき点は、曲の作りが理知的であるということ。旋律の反復とか、頻繁な転調、緩急などを実に巧みに効果的に利用している。

この「新浮舟」は、源氏物語宇治十帖に出てくるヒロイン、浮舟を題材とした曲。薫と匂宮という二人の貴公子に愛され、その板挟みに苦しんで、宇治川の流に身を投げるが、横川の僧都に助けられ、やがて出家して尼となる、その心情が歌われている。作詞は殿上堂方というヘンネームの人物で、恐らく公家であろう。この曲以前にも全く別に、三橋檢校の箏組歌や峰崎勾当の地歌に「浮舟」という名曲が作られているので、区別のため曲名に「新」がついている。

歌の部分では、二人の貴公子に求愛され、その間で呻吟する浮舟の心情が、音楽的に実によく表現されている。ただしあまり深刻な感じではなく、京風にさらりと品良くまとめているのもまた心憎い。

曲は「前唄―手事―後唄」の典型的な手事もの形式で作られており、器楽部分である手事は非常に長く、技術的に大変難しいというわけではないが、緩急も転調も多く複雑で、やはり松浦らしさが感じられる。箏の手付けは八重崎檢校で、はじめから三味線と箏の二重奏で出来ていたかのごとく、付かず離れず、見事に絡み合う。手事は楽器だけの部分であるから純音楽的な展開が面白いので、何かの描写と考えなくても良いのだが、宇治川の流れをも表わしているとも言われるし、そればかりではなく、浮舟の人生がごとくなくそここにふっと暗示されるような、味のある見事な作りとなっている。文学的内容と音楽表現が見事に一致し、しかも複雑な器楽的展開にも富む佳曲と言える。三味線の調弦は二上りで通し、途中で調弦変えはない（箏は平調子で始まり途中少し調弦を変える）。

## 源氏物語 若菜・上

病を得た朱雀院は愛娘・女三宮の行く末を案じ、源氏に正妻として迎えるよう依頼する。兄でもある院からの頼みに、最愛の人紫の上の嘆きを知りつつ、女三宮を正室とせざるを得ない光源氏であった。源氏の四十の賀が盛大に行われた後、二月に女三宮が六条院に降嫁したが、彼女のあまりの幼さに源氏は失望してしまう。……桜も盛りのある春の日の夕方、六条院では、内大臣の息子である柏木ら若い公達が集まり、蹴鞠に打ち興じていた。女三宮は唐猫を抱いて、御簾の影からそれを覗いていたが、どこから来た大きな猫が唐猫を追いかけ、逃げた拍子に唐猫の引き綱が御簾にからまり、御簾がめくれ上がった。その一瞬、柏木は彼女を垣間見してしまう。彼の心には女三宮の美しい容姿が焼き付いて離れず、恋の苦惱が始まる……

## 新青柳歌詞 能「遊行柳」より

されば都の花盛り 大宮入の御遊にも  
蹴鞠の庭の面 四本の木陰枝垂れて  
暮に数ある沓の音 柳桜をこき混ぜて  
錦を飾る諸人の 華やかなるや小簾の隙  
もれ来る風の匂ひ来て

手事

手飼の虎の引き綱も 長き想ひに楯の葉の  
その柏木も及びなき 恋路はよしなしや  
これは老ひたる柳の色の 狩衣の風折も  
手事

風に漂う足許の たまたよとしてなよやかに  
立ち舞ふ振りの面白や  
げに夢人を現にぞ見る

## 源氏物語・浮舟と夢浮橋

浮舟は光源氏の弟である宇治八の宮の三女。母はかつて八の宮に仕えていた女房・中将の君（八の宮の北の方の姪）で、このため父八の宮から娘と認知されなかった。母中将の君の再婚に従い東国へ下り、受領階級の常陸介の継娘として育つ。中将の君は数多い子の中でも美しく高貴な血筋の浮舟を大切に育てた。しかし整いかけた縁談が破れてしまい、家に身の置き場のなくなった浮舟は、今は匂宮の北の方となった異母姉の中君に預けられ、中君の勧めにより今も亡き大君の面影を追う薫（光源氏の次男、母は女三宮、ただし実際の父は柏木）の愛人となった。……浮舟は薫に宇治に聞かれるが、薫はまれにしか訪れることもなかった。一方、匂宮（今上帝の第三皇子、母は光源氏の娘の明石の中宮）は以前二条院で見た浮舟が忘れられず、ついに宇治の居所をつきとめ、薫の留守に忍んで関係を持ってしまふ。浮舟は対極的な性格の二人の貴人に愛される板ばさみに苦しむ。そんな姿を薫は女として成長したものと誤解して喜び、京へ迎える約束をする。かたやそれを知った匂宮はその前に浮舟を引き取るうと考え。やがて事が露見し、追い詰められた浮舟は自ら死を決意したが果たせず、山で行き倒れている所を横川の僧都に救われる。その後僧都の手により出家を果たし、薫に消息を捉まれば自らの元に戻るよう勧められても、終始拒み続けた。

## 新浮舟 歌詞

まめ人の心の薫り忘れねど  
色香もあやに咲く花の  
あだし匂ひにほだされて 慎ましき名も橘や  
小島が崎に誓ひてし その浮舟の行方さへ  
いざ白波の音すこき  
手事

身も宇治川の藻くずとは  
なりも果てなで世の中の  
夢の渡りの浮橋を  
たどりながらも契りはあれど  
涼しき道に入れんとて  
うつつに返す小野の山里